

文化芸能

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、各都市での読書会は現在、休止している。年間百回ほど会に顔を出す山本さんは当初、ひそかに「読書会がなくなつたら気持ちがもたないんじゃないかな」と不安になつたそうだ。それまでは、本業の住宅リフォーム会社経営よりも、会の運営の方が忙しいほどだった。だが自粛の日々は「意外にも静かに過ぎていく」と苦笑いする。

、各都市での読書会に顔を出す山本（ひそかに「読書はつたら気持ちがもやないか」と不安そうだ。それまで住宅リフォーム会でも、会の運営の方などだった。だが自は「意外にも静かに」と苦笑いする。

猫町俱樂部のルールは、自分と違う性質の人や意見を排除しないこと。あとは課題図書を読んでくる決

つてもいけない」  
発足は二〇〇六年。後輩と同業仲間の四人で、名古屋市内でビジネス書を読み始めた。目的はあくまで経営の勉強で、都合のいい方法を選んだだけだった。ただ実際に感想を語り合うと、気持ちが高揚し、想像を超す充実感があった。SNSで仲間を募ったところ、あつという間に若者で膨れ上がった。

『俳句』四月号には、中原道夫の「疫病禍」と題された特別作品二十一句をはじめとして、すでに新型コロナウィルスにまつわる句や記述がいくらく見てとれる。そんな風景のなかにあって、「精銳10句競詠」の欄に掲載された野名紅里「とづくにずっと踊つてゐる」の《あんなところにからうじてつむる雪》という一句に、抜群の感じを受けた。

「俳句には救われていると思う。自分の面倒をみれない」と話にならないので、安心できる言葉を書いていきたい」と記す平成十年生まれのこの書き手の句は、おそらくひとに読まれることよりも前

どうにかも

そ、身ひとつを越えた普遍的な何事かに通じるときがあり、はじめに引用した雪の句もそうした言葉のひとつと捉えることができ。」「あんなどころにからりじて」というあやうさをまざまざと受けとめつつ、同時に自の以外の何を救うにもむずかしい隔たりを感じながら、「つもる雪」が崩れずにど

は、どうまでも無縁のものだ。  
それでも、言葉には、こうした極めて私的なありようゆえにこ

# 土曜曜

福田若心の

どうにかもちこたえる

山本 多津也さん（「猫町倶楽部」主宰）



# 日本最大級の読書会運営

村上春樹、村上龍に言及した吉本隆明の批評集『ふたりの村上』が昨年上梓された。両者を通して、時代の文学や思想の最先端を読み取ろうとした吉本のモチーフがよくわかる。

さてその村上龍、五年ぶりの長編『M I S S I N G 失われているふたりの波』は現実幻想の入り交じる暮りしのなかで、自身の記憶を母の声を通して反芻する。それは心の深い層へ降下する

想である。主人公に母が「あなた」と語りかけるのは、主人公の内部の声なのだ。ストーリー上の現実か非現実かは重要ではない。

無意識をイメージ化する  
一方の村上春樹、今  
『猫を棄てる 父親につ  
て語るとき』（文芸春秋  
が上梓。今まで語ること  
なかつた父の像や自らの  
一ツを書いた初めての試  
だ。偶然母と父を描いた  
者、歳をとつたのか。だ  
文学の先端を行くふたり  
ら今も目が離せない。吉  
の眼力は今なお失せない

2020.4.18

ケストとなり、参加者と直接対話することも珍しくない。これらの話を聞くと、この会は、ものすごくレベルの高い集まりのように聞こえるかもしれない。だが今回、山本さんが新書を書いたのは、読書をむやみに知的な営みとして持ち上げる“誤解”を打破したい思いがあったという。

猫町では、遊び心を感じさせる異色の企画を次々取り入れた。作品にちなんで「帽子」や「浴衣」などのドレスコード

A red compass icon with a yellow needle pointing towards the right.

大級といわれる読書会グループだ。名古屋市を拠点に、東京や大阪など全国各地で年約二百回開かれ、のべ約九千人が参加する。主宰の山本多津也さん(五五)が、発足から約十五年の歩みを著書『読書会入門』(幻冬舎新書)にまとめた。誰かと本の感想を語り合う行為に、知識の交換にどどまらない意味があると説く。

レジュメ作りや発表を求める  
こともない。最も重視するの  
は、感想や解釈を自由に口に  
出して、“出力”しあつこと  
だ。

を機に、東京で捉えられ、  
立派なボーナスを貰う事に成功した。だが、  
そこで彼の人生はまた別の軌道へと進んでしまった。  
それは、彼が「アーティスト」であることを発見したからだ。

京でも開催しはじ  
からのビジネス書  
さらに爆発的な人  
読書会が「仕事  
という文脈ばかり  
ることに違和感も  
を選ぶ。参加者が集まらない  
覚悟でドストエフスキイの  
『カラマーゾフの兄弟』を選  
んだときは、思いがけず百人  
ほどが集まつた。「仲間がい  
るから、自分ででは読み切  
れないような脳が汗をかく本

り、取り上げる本の軸が芸文に移っていく。「面白さを最大限深く味わうには、結論が決まっているビジネス書より、文学のような読みの幅を楽しむジャンルの方が向いている」。直感は当たった。他人と共有すると、一人で読むより理解や思考が広がる。「自分の感想が、自分の体の外にも生まれていく」と気付く

近年、多様な人が集まる居場所としての機能も注目されている。読書家であることで変わり者扱いされた経験がある参加者は少なくない。けれど自分の意見を当たり前に言える場をもつことで、人や社会との関わり方が違ってくる。会の参加者同士での結婚や転職も多いという。コロナ禍でその機能が生かせない時期が続くが、ノウハウには多様な業界から注目が集まっている。

笠木さん  
林忠彦賞  
「社会が求  
代を一番象徴  
贈る第二十九

# 人と共有広がる理解

る人には、違う世界も見せたい」。何より、会をずっと続けたいと願う自身にとって、次回が樂のみとなる工夫でも

近づける言葉

コンパス